

2021/9/7-1

(うと Q 世話し 四文字熟語「義理人情」再解釈 前編)

「自分は義理人情を考えの中の一番上に置いております」

と言ったら、相手の人から呆れかえられました。

絶句して返答がかえってきませんでした。

現代に於いて「義理人情」という考え方よりも、言葉の扱いはそういった位置づけになっているようです。

曰く

古い

時代錯誤

講談、演歌の世界

昔の任侠映画の主題

下町店主の座右の銘

戦前の遺物

古くさく煩わしい

一銭にもならない

出世の邪魔

クっさあ～

等等、

数え上げたらこの言葉が呼び起こすマイナスイメージには切りがありません。

現代の我々が抱いている一般的イメージからは。

突然ですが、此処で話は打って変わって弊社の事業コンセプトなのですが

「国際間、世代間、たまたま隣にいる人との交流事業」

というのがコンセプトになります。

そのうち現在メインで行っている「国際間交流」事業の一環でネパール料理店をネパール人と運営する中で感じたのは

「当初、一番難しいと思われた国際間交流の垣根を意外にすんなり超えられた原動力は、異文化受容や相互理解なんかではなく、なんとこの「義理人情」だった」

と言うことです。

実は、この「義理人情」という一見「死語」のような四文字熟語が「本当に」表すところの姿勢が、国、年代、性別、階位を超えてさえ一番交流できるものなのだと強く感じたのです。

それでは散々馬鹿にされ、現代では古色蒼然どころか上述したように殆ど「死語」にさえなっているこの四文字熟語の「本当の」意味とは一体何なのか？

今日はそれを考えてみたいと思います。

「義理と人情、秤に掛けりゃ、義理が重たい世の中だ」(某歌歌詞)

「知に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくこの世は住み

にくい」(夏目漱石)

これらの言葉に代表されるように、我々は今まで「義理」の事を、人情の機微を解しない無粋で強圧的な「世間様」「格式」「法体系」のようなものとして、換言すれば非人情或いは不人情なものとして無意識にも捉えていた帰来がありませんでしょうか？

或いは「人情」の事を「しがらみ」「非論理」「因習」「領界侵入」等と見なして。

しかしそれは「義理人情」という言葉の正しい解釈なのか？

(続く)